

「分別・無分別」

寺子屋プロジェクト和尚の話 第14回：「分別」

今回は、「分別と無分別」について少しばかりお話をします。

人は、思い詰めると分別に迷って人の道を踏み外します。

多くを持つ為政者は戦争を起こし、多くを持たない人は他人に害を及ぼしてしまう場合もあるようです。

世間的には「分別」というものは、「分別をわきまえた人」等のように肯定的な意味合いで使われます。

広辞苑では、「分別」を「わきまえること。思慮。弁別。」とあります。

『広説佛教語大辞典』では、「分別」を「(現在の)五識(視る・聴く・嗅ぐ・味わう・触る認識)が対象を識別する(思い浮かべる)はたらき。過去の事を追念する(思い出す)はたらき。対象の差別を(未来を)推量し(思い比べて)、はかるはたらき。」と記載しています。

日常的に、私たちの五感(眼耳鼻舌身)を働かせて、感じて思う事(意)は現在の「分別」になります。

現在の私が思う事は、過去の私の思った場面からの感情や欲を思い出します。

現在の思いと過去を思い出した思いを比べてしまいます。

現在と過去の思いを比べてしまうと、どちらかが、私（我）にとって、「善い、悪い、好き、嫌い」と対象を分別し、感情や欲などの思いを分別してしまいます。

分別によってもたらされた感情や欲が迷走して苦に至るのです。

つまり、分別は苦へと至る出発点でもあるのです。

一方、「無分別」は、『広辞苑』では、「分別のないこと。思慮のないこと。」とあります。

『広説佛教語大辞典』では、「①妄想を離れていること。②情念を離れ、真知を体得すること。あれこれと思考をめぐらさないこと。」とあります。

一般的には、「分別」は、「思慮がないこと。」ですが。

仏教的には「思考がないこと。」です。

「分別」とは、善も悪も好きも嫌いも妄想も何も思わないことなのです。

栃木県(昔の下野の国)の小山市を流れる川に思川(オモイガワ)があります。

その川の名前にまつわる民話があります。

お三輪さんという器量よしの娘とその婿市太郎の話が伝えられています。

仲のよかった夫婦でしたが両親の死をきっかけにお三輪さんは、寝込んでしまいました。

婿の市太郎は、お三輪さんの回復を願い、川向こうの神社にお百度参りを始めました。

お三輪さんが、毎晩寝床を離れていなくなる市太郎のことを「どこかにいい女ができたのでは」と怪しんで、ある晩市太郎の後を追いかけます。

そして、川のところまで追いかけてきました。

そして、市太郎が川を渡ろうとする時、お三輪さんは思い余って、「女憎し、市太郎憎し」と、市太郎の目の前で、とうとう川に入ってしまった。。

そして再び川に浮かび上がったのは、お三輪が化身した大蛇(オロチ)でした。

大蛇は、市太郎をひと呑みにしてしまったのです。

その後もお三輪大蛇は近くの池に住みつき人々を襲いました。

その頃常陸の国にいたという高僧が供養したところ、漸く姿をみせなくなったそうです。

人々は兩人とも内緒で事を進めてその思いがすれ違ってとんでもないことが起きたのだと噂し合いました。

そこから「思いの川」「思川」と呼ぶようになったとのことです。

同じような民話が、同じ栃木県那珂川町の「お経塚」(下記注)にまつわる話が伝わっています。ともに大蛇(オロチ)=暴れ川=洪水と、その被害を踏まえ伝える民話かもしれませんが、思い詰めることの恐ろしさその当時の人々が民話に残しているように思います。

その恐ろしさを免れるにはどのようにすればいいのでしょうか。

「無分別」とは、一般的には、「思慮がないこと。」ですが。仏教的には「思考が

ないこと。」、善も悪も好きも嫌いも妄想も何も思わないことです。

坐禅とは、思わない事の練習でもあります。

自分の外の世界の事に、善も悪も好きも嫌いも思わない事。

善や悪や好きとか嫌いとか痛いとか苦しいと思ったとしても、心を動かさず、観察することです。

あれこれ分別して、苦しむ自分を、何も思わず観察する自分自身を見つけていくのが、禅なのです。

私たちは普段何かにとりかかろうとするとき、一息つく、深呼吸をすることがよくあります。

するとそれまでの色々な思いや雑念が振り払われ断ち切られて、一瞬、「無」になり、とりかかる対象の本当の姿があらわれるのではないのでしょうか。

これを「一息禅」といいます。

思いが煮詰まる前に、平常から、「一息禅」によって心を調べ、心が調べられることで行いも調べられるようにしていくと人の道を踏み外さず、生きていきやすいように思います。

以上

(注) 「お経塚」の話も似たストーリーで、仲良く暮らしていた百姓夫婦の妻が病気になり、夫がその平癒を願ってお百度参りに毎晩出かけたところ、それを夫の浮気と疑った妻が後を追いかけて暗闇に姿を見失います。そして嫉妬と疑心にかられて池に

身なげをします。その後、池から大蛇が出て人々に悪さをするため、近くの親鸞聖人に供養をお願いすると、聖人は小石にお経を書いて塚をつくり拝まれたそうです。それからぴたっと大蛇がでなくなったとのことで、その小石が近くのお寺に残っているそうです。

蛇足) 鈴木大拙は、その英文著作を集めた「禅」(ちくま文庫)の一文「愛と力」の中で「力はつねに尊大で、独断的で、排他的である。」と述べています。その力をもつ者が歴史や民族に関する「我」の偏った見方に固執し利害得失・是非の分別をきわめ、夢幻空華を求めようとするとき、如何に多くの人を災厄と不条理に巻き込んでいくか、そのことを私たちは目撃します。度々そしてこの数日。その不条理は、現在を超え次の世代、後々の世代の三時に及ぶことも、仏教は教えています。その教えを、はるか昔この国に根をおろさせようとした古(イニシエ)の人に想いがやられます。この国でも力をもった者がそのことを忘れさったことが何度かありましたが・・・。

(文責 中村彰利)